青いヴェール

松村康平

おさわりございませんか。

幼稚園での講習会も、今日で終わりました。幼稚園の先生がた、小使さんやおばさんまで、幼稚園側のご苦労はさることながら、予定の人数をはるかに上廻わる先生がたが、方々から集まられての熱心な勉強、この春まで実習生だつたほやほや・ピチピチ先生から、老いてなお日々に新らしく前進の大先生が、一堂に会されて、私も自然、はりきつて、講義案をつくり暑いなかにも、楽しい日を過ごすことができましたが。

私の担当が、講習会のおわり五日間で、今日までありましたので、「先生たちは（私も含めて）、これから、夏休みをどのように過ごすべきか」といつた問題にもふれる責任を感じ、「映画の観賞」を奨励してきたところでございます。推せんいたしました映画は「青いヴェール」。

私自身が、映画をみるまえに、筋を読んだり、ひとから感想をきくことを、あまりしないので。それには、「新鮮さ」の失われるのをさける気持があつてですけれど。それで、今日も、内容にはくわしくふれませんでしたが。

純白な、その人の幸福を包むヴェールとひとの子の「いのち」を祝福する青いヴェール。そのどちらを選ぶようになつたか。

この映画では、それを、育児婦として生きてきた一人の女性が教えてくれる。

以前に、「塵に咲く花」という映画をみましたが、その映画では、保育所でのように子どもたちの世話をする女性の一生が、えがかれています。幾人もの子どもたちを扱う女性。主役が、グリア・ガースンだつたからでもありましようが、理知的なひらめきが強く、子どもの世話をする面と、事業を運営する手腕にもたけた女性の姿が、みられました。これにくらべると、「青いヴェール」では、ひとりびとりの子どもに附きそい、やがてはその子から手をひくときがきて、去つていく育児婦の姿がえがかれてこまやかな情愛の動きに、しつとりとした落着きが感じられる。私は、黒板に、鋭角的なプロフィールと、まるみのある幼児の横顔をかいて、二ツの映画から受ける感じを伝えようと試みました。

あのような育児婦は、二人か三人の子ども、多くても十人をこえるかこえない少数の子どもの世話しか、一生の間に、することができない。けれど、そうした生活の中にも生き甲斐を感じる人であつてこそ、多くの子どもたちの保育にも優れた保母であることが、できるのではないでしょうか。

先生だつたらば、この映画のどこを、取りあげられるだろうか。どのような観方をされるだろうかと、考えました。

講習を終わつて、「青いヴェール」をみる先生がたが、どれだけあるでしようか。その感想をきけたらと思いますが、脇役のあのおもちや屋の主人が、どのようなかたちでとらえられるかも、知りたいと思いました。

☆ ☆ ☆ ☆